

## <平成27年度地域別ネットワークミーティングにて

### アドバイザーである豊田教授からのコメント（抜粋）>

#### ○活動拠点について

- ・活動拠点について、活動を進めるには集まる場所が必要であるが、建物でなくてはならないというものではない。秋田県藤里町、限界集落と呼ばれているところであるが、そこでは畑がサロンの場所になっている。畑で収穫したものや植えているものを通じて様々なコミュニケーションが生まれている。
- ・一方都市部では、マンションの一室がいつの間にか住民が集まる場になったところもあり、鍵っ子の子どもも顔を出すようになった。自然発生的な集まりだが、自分達が考えてやるから楽しく、継続するものになる。
- ・神奈川の活動拠点の例であるが、5~6名ぐらいの主婦の方々のサークルの取り組みで、高齢世帯の自宅が集いの場所になっているところもある。手作りの料理などを持ちより毎回色々な方のお宅にお邪魔している。高齢者の方に今度〇〇さん宅に来てみないかという声がけもするなど地域に一步出るきっかけを作っている。地域によって色々な発想がある。

#### ○要援護者支援について

- ・富山県氷見市久目地区には買い物するところもないため、地域の方々が社協と一緒に取り組んだものとして、オレンジポスト箱を町中の色々なところに置いた。住民が決まった曜日までに欲しいものを書きポストに入れ、地区社協の方々が回収し町内唯一の店で購入する。そしてまた各オレンジポストの前で注文した商品を渡す。住民は、そこに集まり会話をしながら商品を受け取ったりしており、地域によって色々な工夫があるものだと感じる。
- ・地域諸団体で手におえないものについては、無理に解決しようとせず SOS を区社協や地域包括支援センターなどに出して欲しい。裏を返すとどれだけ多くの社会資源を活用するかになる。治す医療から支える医療になっているため、病院なども巻き込んでみてはどうか。学校やイオン、農協、生協、制度やサービス、組織や団体を取り込むことが地域を支えるものになる。
- ・地域ケア会議の必要性について  
そこに情報をもっていけば制度や資源に繋いでいくしくみが必要だと思う。東京の豊島区では、地域包括支援センターの対象者を高齢者だけでなく障害者や若年層も入れていくということに向けたしくみづくりが進んでいる。

#### ○地域における福祉活動のノウハウについて

- ・活動を続けていくための後継者について考えていく必要がある。公助は、制度に基づき安定的にサービスを提供できるが、共助は意志や思い、やる気、責任感がエネルギーになり、そうした方々が交代すると活動が低下することがある。活動が低下しないために役割を分散し、集団で活動に取り組む。リーダーは上から引っ張るのではなく、後押しする。（スーパービジョンでは支持的機能という）
- ・目標を達成することに短期的成果を求めない。段階的に進め少しずつ目標を上げていく。
- ・仲間であれば意見の対立もある。集団凝集性を高めるには、排除せず話し合う。